東北工業大学 工学部 都市マネジメント学科 ニューズレター　第 3 号　2012年5月

時空人 NEWS

時空人NEWS は www.jicoojin.com よりダウンロードできます。

982-8577
仙台市太白区八木山香澄町35-1
ce.manage@tohtech.ac.jp
TEL (022) 305-3513
FAX (022) 305-3501

特集

都市マネジメント
– 時空人 1・2期生 活動中 –
Page 2

研究・実践 最前線

繰り返される地震災害
地学（地質学）の知識で防災・減災を！
Page 5

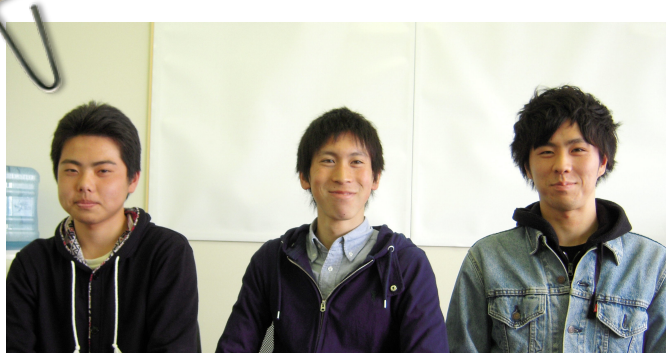
時空人紹介

高橋 敏彦 教授　*Page 7*

皆川 尚輝（4年生 軽米高卒）　*Page 7*

情報ひろば

（学科フェア・オープンキャンパス）
Page 8



都市マネジメントでの1年を終えて　–　*Page 2*

セミナーの一コマ　–　*Page 2*

現地調査　–　*Page 5*

学科フェア@一番町ロビーのご案内

5月18日（金）～23日（水）の期間中に
東北工業大学 一番町ロビー にて
都市マネジメント学科・学科フェアを開催いたします。
詳しくは、8ページをご覧ください。

悠久の **時** をとらえ　資源と **空間** を活かし
思いやりのある都市や地域を創造して
人 と結ぶ　それが **時空人** 。
従来の学科とは違う、都市マネジメント学科のあり方です。

特集　都市マネジメント　－ 時空人 1・2期生 活動中 －

1．まずはお読みください

学科長：小出英夫

学科スタート直前の大地震発生により、学生に対し震災復興に関わる様々な専門知識や技術を教育するという明確な目標が、我々学科教員すべての心に植付けられました。地震直後の昨年4月に入学した1期生の学生達も、大学での授業や学科独自のセミナー、ボランティア活動等を通して、入学時よりも自分自身の卒業後の進路に明るい希望とその責任の重さを感じたようです。また、世の中の復旧復興の進展とともに自らの進路を模索した結果この４月に入学した2期生は、自らが被災したり、思い出の地の復興がままならない状況を感じ、将来の仕事にはっきりした目標を持って本学科を選択した学生が多く見受けられます。

ことあるたびに、本学科は「時空人（JICOOJIN）（じくうじん）」を育てる学科であるというメッセージを発信しています。時空人とは、時間、空間、人間（じんかん）を巧みに操ることやそのような人を意味しており、まさにその能力はこれから何十年と続くであろう東北地方の復旧復興に不可欠な知識・能力・技術そのものです。

本特集では、時空人の卵である1期生（現2年生）からのメッセージや、1期生の昨年度の学習状況の様子、予想される就職状況を中心に大学パンフレットではわからない本学科の様子をお伝えします。

2．学科での1年を終えて ～２年生３人の声～

堰合　亮
（東北学院榴ヶ岡高出身、一般入試）

私は今、東北工業大学、都市マネジメント学科に入学し心から良かったと感じています。高校時代は偏差値やブランドで大学を目指していました。結果的に、全く行くつもりのなかった大学に入学することにしました。しかし、その決断が私の人生において、もっとも良い事であったと、今実感しています。

魅力を紹介します。それは、教授たちの面倒見の良さです。1人1人へのケアがとても行き届いていると感じます。私は当初、大学教授というのはもっと、話しにくい、遠い存在だと思っていました。しかし、実際は全く違っていました。まず、教授たちはいつでもウェルカム体制です。初めて研究室に質問をしにいった際には、とても緊張しました。しかし、ドアをあけるとそこにはニコニコした教授がいました。そして快く研究室に迎え入れてくれました。それ以降、何度か研究室に足を運んでいるのですが、その度に『今日は何をしたいんだ～』『今日は何を企んでいるんだ～』と言わんばかりのニコニコした顔で私を迎えてくれます。私にとって教授たちはとても強い味方になってくれたような気がします。私がやりたい事、興味のあることに全力で答えてくれるのが分かります。それが、都市マネジメント学科に全く関係のない事でも大丈夫です。それくらい、教授たちは学生の意見や考えを尊重してくれます。

その事は、他の大学では経験出来ない事だと感じています。県内の他大学や、東京の大学に進学した高校時代の友人に教授たちの話をすると大変驚きます。他の大学では１年次から教授たちに相談ができる環境は整っていないのではないでしょうか。学生と教員が近い距離にある、それが私たちの学科の１番の魅力だと感じます。その事により私たちは意欲的に授業に参加する事も出来ます。

また、東北工業大学には学長直行便というものがあります。学長に大学への意見や感想をそのまま手紙で送る事ができます。そして学長自ら、返事を返してくれます。もちろん、匿名でも大丈夫です。そのおかげで、今年の３月にタイに短期留学をする事ができました。この留学がとても有意義であった事は言うまでもありませんが、長くなるので割愛させて頂きます。興味のある方は東北工業大学ホームページの国際交流情報サイトをご覧下さい。

また、都市マネジメント学科は就職にも強いです。都市マネジメント学科のホームページをご覧下さい。（本紙4ページもご覧ください：編集者より）

大学の偏差値やブランドにこだわらず、自分の興味のある事ができそうな大学に入学して下さい。そして是非、都市マネジメント学科に入学し、教授たちや仲間とともにいろいろな事に挑戦してみて下さい。みなさんの入学を心からお待ちしております。

赤間　康平
（多賀城高出身、センター利用入試）

私は都市計画、まちづくりについて学びたく都市マネジメント学科に入学しました。最初、都市マネジメント学科は2011年度に新しくできた学科のため先輩がいなくどのようなことを学ぶのか、将来どのような所に就職できるのか分からなく不安でした。ですが入学しガイダンスや授業を受

けるにしたがって、まさに自分がやりたいこと・将来就きたい仕事について学ぶ学科だ、と感じ、入学して本当に良かったと思いました。

授業は数学や英語などの教養科目と鉄筋コンクリート概論や地盤地質学などの専門科目があり、難しい内容もありましたが先生方が分かりやすく丁寧に教えてくださったため、しっかりと理解することが出来ました。進路セミナーという授業ではユニバーサルデザインについての講演や、社会見学として実際に街に出て街のつくりや雰囲気、都市開発について学びました。また、課外活動として「交通を考える研究会」という特定非営利活動法人の活動に参加させていただき、さまざまな意見を聞くこと出来ました。この1年間で都市マネジメントを学ぶための基礎を作ることが出来たと思います。大学生活は残り3年ありますが、これからも様々なことを学び自分の希望する仕事に就けるよう頑張っていきたいと思います。

平野　功樹
（仙台東高出身、一般入試）

都市マネジメント学科に入学して１年が経ち、私はこの学科に入学して多くのことを学ばせていただきました。測量実習や構造力学、鉄筋コンクリート概論など、大学１年間で勉強したこれらの内容は、普通科高校出身の私にはすべてが初めての内容でどれもが新鮮で、興味を持って講義を受けることが出来ました。

大学に入って私が一番心配していたことは、大学では専門的な知識を養う為に毎日講義を受けるので、高校である程度専門的な勉強をしてきた工業高校出身の人たちとはどうしても差が出てしまうのではないか、ということです。しかしそういった不安要素を持っているのはみんな同じでした。工業高校出身の人達は、普通科出身の人達ほど教養科目の勉強に力を入れてこなかった人達もいるので、数学や英語を苦手とする人も少なくはなかったのです。このように大学の勉強において何かしらの苦手意識を持っているのは同じで、お互いに分からない分野を教え合いながら勉強してきました。

また、この学科特有の特別課外授業「プランナー研修」というものがあります。これは２年次に上がった時にエンジニアコースとプランナーコースに分かれるのですが、この「プランナー研修」では、プランナーコースでどのようなことを勉強するのか、先取りで体験学習ができます。先生から出される課題について話し合い、街に出て一般の人に意見を聞き、調べ終わったデータをまとめて全体でプレゼンテーションをします。こういった経験はなかなか出来るものではないので、2年次で学習する内容を先取り学習すると共に貴重な体験をさせていただきました。

また、大学では高校の時と違って複数のサークルを掛け持ちすることで、多くの他学科の友人や先輩と仲良くなることが出来ました。サークルの活動を通して、毎日充実した大学生活を送っています。幼稚園の頃から続けている水泳も、大学の水泳部に所属して大会で上位進出を目指して毎日練習に励んでいます。

大学では勉強や友人関係、サークル活動、何においても自分から行動しないと、充実した大学生活は送れません。しかし、自分から行動して活動をするからこそ大学で楽しむ方法は無限大にあります。もちろん、大学側もその活動をサポートしてくれるので、自分が持つ可能性を最大限に生かすことができます。どんなことにも遠慮はせず、自分が思うがまま行動することが、大学生活を楽しむ秘訣です。

私はこの大学、学科に入って1年前よりも積極的に行動できるようになった気がします。それは私がこの学科に入り、たくさんの経験を出来たからだと思います。まだ私の大学生活は始まったばかりです。これからも自分の成長を楽しみながら勉強をしていこうと思います。

３．都市マネジメント学科への道

新井 信一 教授

本学科の前身は土木工学科です。橋や道路また港や空港、さらに、浄水場や下水処理場や公園など「まち」にとって必要不可欠な社会基盤という環境を整備する重要な分野です。45年前の1967年に、土木工学科としてスタートしてから今日まで、本学科からは実に6432名の卒業生を社会に送り出しており、その卒業生たちの活躍の質と量は東北随一と自負するところです。

事実、いくつかの例を挙げれば、旧日本道路公団であるNEXCO東日本東北支社長（現(株)ネクスコ・メンテナンス東北社長）、仙台市助役に次ぐ立場の仙台市建設局長(元)、高度な技術が命の(株)復建技術コンサルタントの社長、さらに地元貢献で活躍する千田建設の社長、大手建設各社支店長など、様々な重要な立場で本学科の卒業生が活躍しています。

世界的にも先進の技術を学ぶ場として、土木工学科はその役割を果たしてきましたが、一方、社会が成長するにつれ快適な生活環境と自然との調和が重要な事項となってきました。そこで2003年には、カリキュラムの内容に計画系の科目とIT技術の活用を図る科目などを加え、機械・電気・情報・環境などのいろいろな分野を統合した大規模システムの構築を可能とする、そのための学習ができる学科とし、名称を建設システム工学科に変更しました。

以来、学科の教育システムの充実に努め、2006年に本学科は、日本技術者認定機構（JABEE)から世界標準の教育プログラムが実施されている学科である、との認定を受けています。

1998年頃から18歳人口の長期的な減少が始まり、加えて、経済成長の鈍化や公共投資に対する国民の意識の変化が顕著となり、これまで培ってきた高度なものづくり技術だけでは行き詰るようになりました。つまり、町に高規格の道路を通すばかりでなく、徒歩で散策する、あるいは自転車で回遊できるような心地良い道を、財政を踏まえて工夫して造っていくことに関心が移ってきています。

そのため2011年から本学科は、「まち」にとって本当に必要なものは何かを判断できる人材を育てるべく、名称を都市マネジメント学科とし、新しい3人の教員を迎え、二つの学習コースを用意しました。すなわち、これまでの先進の技術を学ぶエンジニアコースと、歴史や文化や観光資源などを活かしたまちづくりを学ぶプランナーコースです。

この様に本学科は、未来をとらえたまちづくりの学習ができる学科となりました。今後とも東北に有為で必要不可欠の卒業生を送り出し続けます。

４．引き継がれる就職実績（就職率100%）

小出 英夫 学科長

都市マネジメント学科の1期生も、次年度の12月頃から就職活動が始まります。多くの学生が、大震災からの復旧・復興に関わる「まちづくり」に関連する仕事につくことになります。関わる専門分野の性格上、国民・県民・市民等からの税金を基とする仕事になることが多く、そのため、公務員への採用枠も、他の工学部他学科と比較し雲泥の差があります。これは、専門的に近いにも関わらず、建築系学科との大きな違いです。

都市マネジメント学科は2年次よりプランナーコースとエンジニアコースにわかれます。エンジニアコースの教育内容は、ほぼ従来の建設システム工学科を踏襲していますが、プランナーコースはその教育内容とも関連し今まで以上に公務員希望者が集まっています。復旧・復興に関わるまちづくりのための専門知識を有する公務員の需要の急増に加え、そのような知識を有する多くの公務員が定年の時期を迎えることとも重なり、採用枠は今後数年拡大し、学生自身の努力も当然必要ではあるものの、学生が希望を叶えることができる可能性はとても高い状況にあると考えています。

当然のことながら、民間企業への就職を希望する学生も多くいます。こちらも非常に好調です。それは今年の３月に卒業した建設システム工学科の学生の就職状況からうかがい知ることができます。大学院進学者を除いた全学生（文部科学省が定義する就職率、すなわち分母が「卒業者数－大学院進学者数」において就職率100%を達成）が、昨年12月末までに専門性を活かす企業、例えば東証1部上場の建設や道路関連企業、東日本旅客鉄道株式会社（JR東日本）等の公共施設関連企業、地元建設会社や建設コンサルタント、塩釜市役所や各地域の公益法人などから内定を得て、この4月から社会人として頑張っています。東北地方出身の学生が多く、地元や東北地方に残りたいという希望を持つ学生も例年少なくありませんが、ほぼその希望を叶えています。ちなみに、現4年生も、4月上旬現在、既に5名が1部上場企業等から内定を得ています。

このような結果を示すことができている理由は、大学キャリアサポート課（就職課）によるサポート活動はもちろんのこと、本学科教員による親身な就職斡旋等の指導や、１年次から実施している学科独自の各種セミナーを通しての学生の意識向上の成果と感じています。このような学科内の取り組みは、当然のことながら都市マネジメント学科にも受け継がれ1，2期生に対して既に実施されています。

５．都市マネジメント学科1期生の学習状況

菊池 輝 准教授

ここでは、昨年度の教務委員として、第1期生の学習状況を振り返ります。

本学では、1年間に履修登録できる単位数の上限を設けています（CAP制）。授業時間だけでなく、空き時間や自宅で、十分な予習・復習が可能となるよう、時間割に余裕を持たせ、1つ1つの科目の理解を深めることが、この制度の目的です。入学年度により差がありますが、昨年度の入学生は年間49単位に設定されており、この制約の下で計画的に履修登録を行うよう、各セミナーを通じて指導しています。

都市マネジメント学科1期生は、昨年度平均約47.6単位分の履修登録を行い、結果として平均41単位を修得し、平均86%の単位修得率という結果でした。また全58名の学生中20名（約34%）が、履修登録した科目すべてに合格し単位を修得しました。本学科では3年次への進級条件を「2年次終了までに62単位以上修得」としていることを考えると、1期生初年度の頑張りが伺える結果と言えます。

成績上位者（トップ10）に目を向けると、修得単位数は平均48.4単位、平均得点が83.8点、平均GPAが3.1、そして全員が単位取得率100%でありました。適切な履修計画により、講義外学習時間が増加し、各科目の理解度も高まったことが一つの要因であると考えられます。

また、この成績上位者10名の出身高を見ると、普通科出身の学生は7名でした。普通科以外の出身学生にとっても、本人の努力はもちろんのこと、スムーズに大学教育へ導入ができるよう、カリキュラムが構成されていることを裏付ける結果と言えます。

さらに本学科では、大学生になった途端に気が緩むことがなく大学での学習を習慣づけるために、また毎日の生活パターンを築くためにも、1校時目が空き時間とならないよう、時間割の設計に配慮しています。一般的に1校時目の講義は欠席や遅刻が多いと考えられがちですが、本学科ではその傾向は強くなかったと感じています。

繰り返される地震災害・・・地学（地質学）の知識で防災・減災を！

千葉 則行 教授

自然を理解しながらのまちづくり

日本列島は地質が脆弱で気象条件も厳しいため、毎年日本中の至るところで地震・台風・雷・洪水などによってもたらされる大きな災害が発生しています。地震の災害例をとっても、兵庫県南部地震（阪神大震災1995年）以降、宮城県北部地震（2003年）、新潟県中越地震（2004年）、福岡県西方沖地震（2005年）、能登半島地震・新潟県中越沖地震（2007年）、岩手・宮城内陸地震（2008年）、そして東北地方太平洋地震（東日本大震災2011年）などの立て続けに起きた地震で災害が発生しています。一方、豪雨災害となると毎年のように西日本を中心に発生しています。

このような災害をもたらす地震・台風・豪雨などの現象は、もともと地球上で太古から営々と営まれてきた自然現象です。また日本の大都市のほとんどは、約2万年前以降の海面変動（海進）によって形成された軟らかい地盤上に立地しており、これが災いして様々な地盤災害（沈下、液状化、地震動の増幅など）が引き起こされています。市民が安全にかつ安心して快適に暮らせるようにするためには、こうした自然そのものを十分理解した上での「まちづくり」が不可欠であるといえます。

地盤地質学と土砂災害

私の専門分野は「地盤地質学」ですが、講義では「まち」を取り巻く様々な地盤環境を地質・地形学の面から解説しています。また研究室では「自然災害に強いまちづくり」を主なテーマとした調査・研究活動をしています。具体的には、地球科学（地質・地形）の知見を応用し、地すべり、崖崩れ、土石流などの土砂災害の発生メカニズムを究明しています。最近は、新潟県中越地震以降、特に目立ち始めた「地震による」地すべりにも注目して研究・調査活動を行っています（地すべり：すべり面が緩い傾斜で、土塊の乱れが少なく原形を保って滑り下る現象をいう）。

巨大地すべりを引き起こした想定外の地震

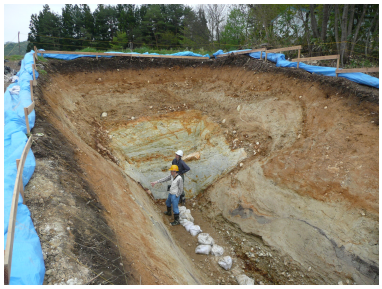
「2008年岩手・宮城内陸地震」

従来、地すべり研究者の間では、地震による地すべりの事例が少ないために研究報告件数も少なく、また緩い斜面上で発生するような地すべりはむしろ起こりにくいとされてきました。ところが新潟県中越地震、そして岩手・宮城内陸地震では大規模な地すべり災害が随所に発生し、これまでの常識が大きく覆されました。その中でも特筆すべきは、岩手・宮城内陸地震時に栗駒山麓（宮城県側）の荒砥沢地すべりが発生したことが挙げられます。戦後国内最大の規模とも言われ、全長約1.3km、幅約900m、すべり面の深さ約250m、そして地表部に現れたがけの高さが最大150mという、とてつもない巨大地すべりでした。このような巨大な地すべりは地質年代的な時間スケールで起こるものであり、同じ地点では数千年から数万年に１度発生する程度の頻度と考えられます。地震発生以前に撮影した空中写真を地形判読した結果では、荒砥沢地すべり地およびその近隣には、もともと四つの大規模な地すべり地形（過去に発生した地すべりの痕跡）が並列に存在しており、このうち三つの地すべり地形の範囲が一体となって巨大な地すべりを引き起こした（再活動した）ことが分かりました。しかも四つの地すべり地形のうち、荒砥沢地すべりの発生した範囲の中心部にあたる地すべり地形が、最も古い時期に発生し形成されたものであることも明らかにされました。

荒砥沢地すべり

以上のことから、荒砥沢地すべりの発生場所の特徴を挙げてみると、まず過去の地すべりによる古い傷（岩盤の分離破壊）を持っていた斜面であったこと、また今回の地すべり発生の主役を演じた最も古い地すべり地形のところで、長年の間に沢の侵食が進んでいたことです。特に後者については、発生前の空中写真をみると、今回の地すべりが発生した斜面の三方を取り囲むように深い谷が入り込んでおり、これによって斜面が支えを失っていた（不安定化した）様子を読み取ることができます。こうした条件が少なくとも地すべり発生の一因になったと考えられます。

巨大地すべりを引き起こした岩手・宮城内陸地震は、岩手県南部から宮城県北部にかけての内陸部で北北東一南南西方向に伸びる長さ約20kmの活断層によって発生したものです。これまでこの内陸部



活断層トレンチ調査

は活断層の空白域とされていたので、活断層研究者の間では「想定外の地震」として注目を浴びました。その後のトレンチ調査では、最近の１万年の間に今回の地震も含めて４回ほど活動していたことなどが明らかとなりました。一般に、海溝型地震は数十年といった短い再来周期であるのに対して、内陸型（直下型）地震のものは極めて長い再来周期をもつのが特徴です。岩手・宮城内陸地震は、まさに数千年ぶりの地震であったということなります。

広範囲に土砂災害を引き起こしたもう一つの想定外の地震

「2011年東北地方太平洋沖地震」

2011年（平成23年）3月11日の14時46分、牡鹿半島の東南東約130Km、深度約24Kmを震源とするM9.0の地震が発生しました。この地震は広範囲の強震域をもたらすとともに、大規模な地殻変動よってマグニチュード7内外の関連地震を誘発させるなど、東日本の太平洋側全域にわたって未曽有の大災害を引き起こしました。この災害の特徴として、沿岸部の津波による被害がマスコミで大きく取り上げられてきましたが、内陸部でも各地で土砂災害が発生しました。

地震発生後、(社)日本地すべり学会が結成した東北地方太平洋沖地震研究グループの一員として私も加わり研究調査を行ってきました。同研究グループの調査結果でこれまでに明らかになったことを紹介すると、土砂災害（崩壊・地すべりや造成盛土宅地の変状）の集中域としては、1)宮城県松島湾周辺地域（崩壊）、2)宮城県三陸南端部（崩壊・変状）、3)仙台市(盛土宅地の変状）、4)福島県中通り南部～栃木県北部（地すべり・崩壊）、5)福島県いわき市周辺（崩壊・地すべり）などが挙げられます。これらの地域は、プレート境界が露出する海溝中軸部から約200km以内の震度の大きいところに相当しており、しかも発生箇所数および発生密度が震度5強域から目立ち始め、震度6弱で急激に増加するといった特徴が分かりました。

また、地質との関係についてみると、古第三系、新第三系中新統の堆積岩分布域に発生が多く、特に宮城県・松島湾周辺の小起伏な丘陵地では、節理の多い中新統の層状軟岩からなる海食崖(過去に海食を受けた急斜面)で多数の岩盤崩壊が発生していることが分かりました。また、福島県中通り南部～栃木県北部の各地で甚大な被害（人的被害も出た）をもたらした移動距離の大きい地すべり性崩壊は、第四紀の火山灰質の厚いローム層が覆う丘陵地・台地縁部に集中していること、さらに仙台市内の丘陵地で発生した約4,000にも達する宅地被害のほとんどが、盛土造成宅地の変状に起因していることなどが判明しました。

以上のことから、地震による土砂災害の条件として、震度（最大加速度、継続時間）と地質・地形条件（強度異方性を持つ岩盤、　降下火山灰を含む厚いローム層の載る丘陵地・台地斜面など）が挙げられ、またキレツ性節理・層理面の存在や斜面形（地すべり地形、斜面微地形、埋没谷、地下水の供給されやすい盛土など）なども重要な発生素因として浮かび上がってきました。

おわりに

以上のような地震による土砂災害の発生条件やその場の地形・地質的背景を十分把握しておくことは、復旧・復興に役立つばかりでなく、これからの被害想定や減災にとって重要なことです。今後も学生とともに調査・研究活動に取り組んでいきたいと思っています。

松島の岩盤崩壊

仙台市の宅地被災（１）

仙台市の宅地被災（２）

福島県の斜面崩壊

千葉研究室による現地調査

高橋 敏彦 教授

専門は、海岸工学です。現在、日本を含め世界各地で砂浜が消失しつつあります。また地球温暖化の影響による海面上昇や台風の強大化が懸念されています。これらに起因する海岸災害が、今後多く発生すると予測されます。これから、海岸の防災に関する研究は益々重要になってくると思います。また海岸は、海水浴、釣りや散歩などのレジャーの場であり、そして憩いの場でもあります。このような海岸利用のあり方や、よりよい海岸環境についても研究が必要になってきています。

本研究室では、護岸前面の砂浜の消失や洗堀によって、護岸前面の水位が高くなる割合と波の打ち上げ高さや、越波の増大の割合などの関係を実験、数値計算や現地調査によって検討し、被災を未然に防ぐ方法を研究しています。また、レジャーや憩いの場としての海岸利用など、よりよい海岸環境の保全のために、海岸利用者を対象に海岸利用と波浪の関係や海岸環境意識に関する現地調査等も行っています。研究の成果は、現在の護岸の設計方法では、条件によって波の打ち上げ高さが過小評価になることや、海面が1m上昇すると越波量が6～10倍になること等が分かりました。海面上昇を考慮した波の打ち上げ高さの実験式を学会で提案しております。また、仙台市の向洋海浜公園（仙台新港）や近くの海岸を利用する（サーファーや散歩者）7割の方が県内で、3割が県外（多くが関東圏）の方であること等々が分かってきました。サーファーが好む波の高さ、砕波形態や砕波継続時間との斬新的な関係なども解明しつつあります。昨年の東日本大震災による津波の被害調査を、仙台平野（亘理町、名取市、若林区荒浜、仙台新港周辺）を中心に行いました。海岸からの距離と家屋被害の関係を学内の震災研究シンポジウムで報告いたしました。その結果等は、河北新報にて紹介されました。

趣味は、鮎の友釣りです。ホームグランドは山形県の小国川ですが、釣れている東北の河川なら、どこへでもいそいそと出かけております。毎年名取川や広瀬川の河原で行う卒業研修生との芋煮会には、天然鮎の塩焼きを振る舞っております。学生には勉強は勿論ですが、人間関係や社会のこと等多くのことを学んで、一回りも二回りも大きな人間になって卒業してほしいと願っています。

高橋 敏彦 教授　略歴

*1974*年　山形県立新庄工業高等学校卒業
*1978*年　東北工業大学工学部土木工学科卒業
*1978*年　東北工業大学工学部助手
*1993*年　東北工業大学講師
*1998*年　東北工業大学助教授
*2004*年　東北工業大学教授
学位 *1999*年*3*月　博士（工学）（北海道大学）

皆川 尚輝（建設システム工学科４年生、岩手県立軽米高出身、センター利用入試）

私は小学生の時に自分の生まれ育った町が洪水によって破壊されていく様を目の当たりにし、災害の恐ろしさが脳裏に焼き付きました。その体験・実感こそが、この建設システム工学科を専攻した理由です。その後の復旧活動をしている現場を見ていて自分も「誰かのために、何かできる自分になりたい」と強く思っていました。また、昨年の東日本大地震を受けてその思いはさらに大きくなりました。

今回の地震では、今まで築いてきたものが破壊され、今まで普通に出来ていたことが出来なくなり、「無力さ」を痛感させられ、そして「人というのは、誰かに支えられて成り立っている」ことをあらためて実感しました。そして、人は力を合わせることで、困難にも立ち向かっていける生き物であることにも気がつきました。工大はそんな仲間を作ることができる場であり、また、たくさんの人たちと出会うことによって自分自身が成長していける場だと思います。そんな「出会い」一つ一つをこれからも大切にしていきたいと思います。

そして、私の学ぶ「建設」「土木」の分野はこの地震の復興作業に大きく関わっているため、活躍できる場がたくさ

んあると思います。私はこの大学で、まちや都市における土木計画学の役割を学び、復興作業ももちろんのこと、行政とのつながり、住民の生活、自然環境等を含めた「より良い社会の実現」を目指し、社会人として活躍したいと思っています。

最後に、大学生というのは勉学、部活動、アルバイトなどやれることはたくさんあります。それらを経験することが今後の自分の財産にもなる、すなわち、今しかできないことをすることが大学生という時間を有意義なものにすると思います。なので、後輩のみなさんにも色んなことに挑戦してもらい、その中で様々感じ、考えてみてもらいたいと思います。もし、挑戦して失敗しても、それをバネにし、次につながるような行動をしていくことも大切ではないでしょうか。

情報ひろば

学科フェア@一番町ロビー 1F ギャラリー

就職率100%「時空人」の魅力に迫る

就職率100%は「教育」「研究」「社会貢献」に対する、社会からの評価結果の1つです。今回の学科フェアでは、都市マネジメント学科や学科教職員・学生「時空人（じくうじん）」の魅力をお伝えします。学科紹介はもちろんのこと、震災復興関連の話題から、もっと先の夢のある話まで...

またフェア期間中には、以下の大学講義公開授業や、特別講演を実施します。どなたでもご自由に参加できますので、お気軽にお立ち寄りください。

公開授業１：「暮らしを支える材料（小出教授）」　5月18日（金）15:30-17:00
公開授業２：「建設マネジメント（今西教授）」　5月22日（火）13:30-14:50
公開授業３：「鉄筋コンクリート応用（小出教授）」5月22日（火）15:00-16:20
特別講演　：「リーダーとマネジャ（今西教授）」　5月18日（金）18:30-20:00

問い合わせ先
東北工業大学工学部都市マネジメント学科　担当：中山教授　　電話：022-305-3537

【予告】第1回オープンキャンパス

6月24日に開催予定の第1回オープンキャンパス。都市マネジメント学科は「学生の、学生による、学生のためのオープンキャンパス」をテーマに、現在企画構想中です。現役の工大生、大学院生から直接話を聞くコーナーを中心に企画いたします。大学の先生からは聞くことが出来ない、学生目線の工大生活ホンネ話を聞いてみませんか？　是非、都市マネジメント学科の会場に来てください。

なおオープンキャンパスの詳細は、本学ホームページ（http://www.tohtech.ac.jp/）でアナウンスいたします。

編集後記

都市マネジメント学科の2年目がスタートしました。学科長は新井教授から小出教授へとバトンタッチし、以前にも増して、学科一丸となった気がいたします。私自身は2年務めた教務委員から、今年度は就職担当となりましたが、この時空人NEWSの編集は引き続き担当いたします。今後ともよろしくお願いいたします。　（記：菊池 輝）

「時空人NEWS」Vol.3
発行者／東北工業大学 工学部 都市マネジメント学科
982-8577　仙台市太白区八木山香澄町35-1　Tel:022-305-3513　E-mail:ce.manage@tohtech.ac.jp